



1351

源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

源氏物語

六位物持傳七源氏物語

源氏物語

1352

1272  
6

河海抄卷第六

正六位物 源惟良撰



第九 阪磨

光源氏漏居此浦之故名之



かろと海にじりて人共下りてあり

光源氏大將在納之りじりて為くけ下りて隠居を  
らねん古來赴漏而人配流の宣旨にありて  
左邊よりありて源氏大將の流りておろわくわきと  
城介は筑居をりるや同云且東征れ流りて行つる  
ん風音の憂美しお似たり又新年中納之りて此は  
古今集云田に津浦にありて津國と  
よみたりとありて多る母美はらよ多る人は流り  
しりてはらひの傳の御相と云はれ詞に隠居の國なり

片々しき物も可なり

人しあはくひさしきさきとて井

叨ヒタリ

あふくきりり

我意の事とて人々をなすりて  
わたりしき物とて

かりそめ思ひし別の出るるあり

入る官ありと 藤太女院

男女よかき次位はのちよ入る入道と号とせり

友原道子 三条白河志女 天禄元年三月十九日為齋世

号入道官

おしりしき物とて

細代車

兼花物語之あるしりしりしりしり

法内大内左遷の時の事也

く井とて

教仕の辞官不拜位と階位と上の罪科と何の

かゝりし位とて

史記 秦本紀 曰如淳曰嘗有爵而以罪棄爵以

皆稱士位といひ但唐朝の位と辞とる事也

あらん 規貞記 或又しりしりしりしり

今大内と名位是階と和語し何の

おしりしりしりしり

貞親政要云玄欽より一居瑞極十名五年類表

辞位優詔と新十名六年進洋司空云欽後八年

老清政位

わさうららふきうしあひくす

腰と肩すうを友仕の礼也しんじとくはつとある体  
退まふ

つらげや東世の

寂強

伊勢物語よりつらげや東世のといふことしきけり  
親の云すやあめを也水原系年よりいふことしきめり

業と並めぬ早の字につらげや東世の

つらげや東世

つらげや東世のいふことしきけり

店子の壽則多傳

あめれあひあひのうらふらふ

休之末勅也

伊勢日月海比のいふ所のいれ

あつたあつた

あつたあつた

息の意はま也 物意はまのあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた

席狼 仁 店子

仁の身物席狼とつらげや東世の

つらげや東世

佛涅槃の河を席狼と花をくひ人と祇とつらげや

つらげ

つらげや東世

平治五年也 或は平治北画版散班宿老とつらげや

常着之今源氏と評定人とは仍若れ  
岩のり中の中りしなり

あつし忠り中の中りしなり  
あつし忠り中の中りしなり

空為 和記

ひき名はふしと名いしなり  
こころはとふしと名いしなり  
奥入ふしと名いしなり  
他と名いしなり  
空為中事と名いしなり  
と名いしなり

あひまはひと物なり  
あひまはひと物なり

そととぬ海のとそととぬ海のと  
文集のふしと名いしなり  
琴のふしと名いしなり

浅琴一巻 儒道佛書各 三兩卷 樂天既来  
為 良文集 草堂記

あつし忠り中の中りしなり  
あつし忠り中の中りしなり  
あつし忠り中の中りしなり

あつし忠り中の中りしなり  
あつし忠り中の中りしなり  
あつし忠り中の中りしなり  
あつし忠り中の中りしなり  
あつし忠り中の中りしなり

あつと水鏡みづかがみ

文選ぶんせんより水偏みづへんと西日にしひと水みづをわたりて水鏡みづかがみ

と云ふなり北きたより北きた一ひと流ながせりて水鏡みづかがみの

北伊勢きたいせ

物ものの形かたちにふまゝ後のち成なりつ女をんなをけりつと物語ものがたり中なか才さい一ひと考かう

つらやと云ふ事なり

いせ海うみの河がはを神かみより形かたちの違ちがひをみよる事なり

水尾みづお可か水際みづぎはと云ふ事なり

形かたちの川がはより水鏡みづかがみなり

水鏡みづかがみより廻まわる各おの各おの事こと也

流ながる事ことなり形かたちの違ちがひをみよる事なり

水鏡みづかがみ

神代天皇七十六年春三月崩檜原宮時年

一百廿七歳の年秋九月葬畝傍心比山陵

事記物語ことぎものがたりの傳つたへ殿との夜よすけりて水鏡みづかがみの

て流ながる事ことなり形かたちの違ちがひをみよる事なり

して水鏡みづかがみの形かたちにふまゝ後のち成なりつ女をんなをけりつと

水鏡みづかがみ

あつと水鏡みづかがみの形かたちにふまゝ後のち成なりつ女をんなをけりつと

物語ものがたり中なか才さい一ひと考かうつらやと云ふ事なり

いせ海うみの河がはを神かみより形かたちの違ちがひをみよる事なり

水鏡みづかがみより廻まわる各おの各おの事こと也

流ながる事ことなり形かたちの違ちがひをみよる事なり

水鏡みづかがみ

神代天皇七十六年春三月崩檜原宮時年

一百廿七歳の年秋九月葬畝傍心比山陵

事記物語ことぎものがたりの傳つたへ殿との夜よすけりて水鏡みづかがみの

て流ながる事ことなり形かたちの違ちがひをみよる事なり

して水鏡みづかがみの形かたちにふまゝ後のち成なりつ女をんなをけりつと

水鏡みづかがみ

五百二十一日

神見 神見 神見 神見

神見 神見 神見 神見 神見 神見

神見 神見 神見 神見 神見 神見

神見 神見 神見 神見 神見 神見

神見 神見 神見 神見

神見 神見 神見 神見 神見 神見

神見 神見 神見 神見

神見 神見 神見 神見

神見 神見 神見 神見

神見 神見 神見 神見

神見 神見 神見 神見

神見 神見 神見 神見

神見 神見 神見 神見

神見 神見

神見 神見 神見 神見

神見 神見

神見 神見

神見 神見 神見 神見

神見 神見 神見 神見

神見 神見 神見 神見

神見 神見 神見 神見

神見 神見 神見 神見

神見 神見 神見 神見



十丈紅既成之誠字海使花浮疾行如駢放  
若其紅曰枯野

不似其紅曰枯野  
のりけり

後接遠集良選法師

一祝云 後為橋東小橋岸ふみ下じけり  
後接遠集良選法師

時遇石原依而向之遂相慈答石原既放力遇  
也舟遊江潭戲孔側行吟潭畔綴也靦色惟揮

杜詩注曰石原名宅在陽川  
後漁林園志程曰荆川記稀歸縣小一百里  
右尾平故宅方七頃果石為屋基上此在

承平  
うや海しるむらす

十一月長至夜三千里外をり人若為猶宿揚  
梅鉢次枕單床一病身

三千里外行路十九年同任將道在昌賦  
かゝる志あつても大か

海平

十一月長至夜三千里外をり人若為猶宿揚

梅鉢次枕單床一病身

三千里外行路十九年同任將道在昌賦  
かゝる志あつても大か

この夕舟り名ぬきをたれとわらふ舟の、さしはく  
家より舟落るとくぬく天河とまらぬゆめをのりて  
たんとす下い行平中納言をいふてつゝいふ事か  
思ひこれとれたし事にあたりてはく國津川に  
ゆきこゝろ舟のりゆきけりふとまらぬ中より  
まらぬよれりし事か

在原行平納言

こゝろふとふ人あつてはく舟のりゆきけり  
つりと海をゆきまらぬ事か  
志の波ををれりてつるはれあまのつるあはれをわら  
がかりゆき舟のりし事か  
徳重夜宿とつるしと絶絶とつるしと絶也持多をも  
平宿とふ重夜也白絶夜とつるしと絶絶とつるし

しつる治しとれたしとらるる舟のりゆき  
舟のりゆきとつるしと絶絶とつるしと絶也持多をも  
舟のりゆきとつるしと絶絶とつるしと絶也持多をも  
舟のりゆきとつるしと絶絶とつるしと絶也持多をも

健

舟のりゆきとつるしと絶絶とつるしと絶也持多をも  
舟のりゆきとつるしと絶絶とつるしと絶也持多をも  
舟のりゆきとつるしと絶絶とつるしと絶也持多をも  
舟のりゆきとつるしと絶絶とつるしと絶也持多をも

舟のりゆきとつるしと絶絶とつるしと絶也持多をも  
舟のりゆきとつるしと絶絶とつるしと絶也持多をも  
舟のりゆきとつるしと絶絶とつるしと絶也持多をも  
舟のりゆきとつるしと絶絶とつるしと絶也持多をも

花江氏令持後... 叙意子言中... 色霞之極愛不漸... 謝章膾炙人口... 又其... 作亦且菊酒為非... 長齋決不破... ぬりけり... くらんくせ

伊豫人志浪のうつく小舟... 世人をあや... 小舟より七深... じく... 尚侍退中事

或礼云九條殿六君... 永延元年九月十... 六日... 侍初系春官... 長徳之間... 惟... 吾國私与洋... 大弼相之物... 軒位... 其... 覺退中

平中納言の用... 奥入之... 平中納言... 松... 奥入之... 平中納言... 可為... 宣物... 方... 松... 奥入之... 平中納言... 可為... 宣物... 方... 松... 奥入之... 平中納言... 可為... 宣物... 方... 松...

松... 奥入之... 平中納言... 可為... 宣物... 方... 松... 奥入之... 平中納言... 可為... 宣物... 方... 松... 奥入之... 平中納言... 可為... 宣物... 方... 松... 奥入之... 平中納言... 可為... 宣物... 方... 松...

松... 奥入之... 平中納言... 可為... 宣物... 方... 松... 奥入之... 平中納言... 可為... 宣物... 方... 松... 奥入之... 平中納言... 可為... 宣物... 方... 松... 奥入之... 平中納言... 可為... 宣物... 方... 松...

松... 奥入之... 平中納言... 可為... 宣物... 方... 松... 奥入之... 平中納言... 可為... 宣物... 方... 松... 奥入之... 平中納言... 可為... 宣物... 方... 松... 奥入之... 平中納言... 可為... 宣物... 方... 松...

信じていふ事は玉のふりあつて一なるさう風もあ  
屏風志のりてわらわ

屏風の表裏支説ありやと云ふは物語り一繪の  
方とててり用らるる細業候事と云ふは

或説云字多西宮支説也字多小菟昔方と云ふ  
用西宮説とい繪と向とも仍式座の母屋廂を屏

風の志つたの支家各別といけ物語じの西宮  
の説と云ふと云ふは向く繪の向ははる事

其共謂く 水原抄

この以上より下りて枝はのりて物語り

千枝 常則 左高若緑 右の畫工也

應和元年の月九御記云と云ふは志形多の戸帝

別号畫西廂南壁白澤王像 常則若字天丁 御記中多を

はかりあつてまつて皆之と云ふはるらあり

作繪 新様玉記

はかり繪はすくはるると云ふはるらあり深具

かきしる畫と改筆して文とせりやと也

線色を畫師志に傳あり也

あつたあやと云ふはるらあり御記に云ふはるらあり

はるらありやと云ふはるらあり

白儀の御夜より一葉荒色への指貫れつるやと云ふ

並夜といふはるらあり濃うの字也一葉荒色を

向はるらありと云ふはるらあり

將述年一佛才子と云ふはるらあり

天加年一佛才子茶歸命頂礼白佛言支善提

道樹之月新遊隨波羅之慈之居連禪河

之水音空相跋提文淑浪 舟物文粹 叙文  
ゆりかき 後之のよめをいへ 爰は野曲を拍  
子りとも後急火川と付し  
たすの舟よりうらひぬちりてこれゆきかたを  
きこむかのふと比ひたれをいふところやゆき

鳥船事

日弁記曰流生神名多々石楠 船神亦名祝  
天鳥船神次生鳥響椽樟船神  
爰火と虫見尊御奇

不才の鳥船とけくちりふまのゆきと云はれぬらふ  
おらりたりや船のふも舟と船と小せくおらりたり  
にりくも舟りゆきと危舟と危舟りかた所くちりたり  
船はくゆきとふゆき也

不才の鳥船とけくちりふまのゆきと云はれぬらふ  
けりるの鳥とけくちりふまのゆきと云はれぬらふ  
家為速若汝来賓共是蕭々椽漂身鼓枕思  
帝降去日家知行来汝明春 同宿 菅家後集  
んくちりふまのゆきと云はれぬらふ  
帝世回 名紀 菅家集  
四事弁記 少爰名命行到德野之御崎遊遍  
於乃世回美

去成すつ海つたらの末通女宮と帝世の末  
通女鴨 万葉 松浦仙客奇  
又詠浦崎子長奇 白雲れ節しりかく帝世人  
棚川 万葉

皇神祖の可見徳大御世尔田道同守帝世系

和夕利夜保毛知麻派約之茶古同守

るまじせぬわりのこよのこよのけしきまうりやかりし

今業とこよの帝理世のん

日午託竟宴候五位下約大介礼近江守極三統宿  
祢云忠作哥詠思意祢云

天照太祢ありの志とくしら給し時よの祢云  
あけのひくこよのあつたれも何あいのあつくを  
せらるゝととらあなり 見り中記

仙境の名は け哥ごと我座よととら  
月乃の海のまき

月類似鏡すの罪風家如口不伐然 後集  
二子星のたけ故人ををさうら

三五夜中新月色二子星外故人を 示天八月十日

け約を白示天八月十日夜禁中丹 禁中格左對月  
多え九

垂しと對月元稹丹とけ約の一句也今夜殿  
上と昔世思いつけ約と海せし是希れ尤  
有悲夜平

恩賜の湯夜のりてふありやす

去年と一夜約清涼林憶約篇独以賜恩賜  
津夜今をけ約約毎日津餘名 後集

大哉そのりけりけりく好い

子ららせんのかまのま

筑前守 維為 都督 下守 以下官の件  
榮花物語 柿殿所 今ふおりし

行り大貳家國物居りかきまきて海軍  
心しうほくすつりわく先産業して其こゆ  
東北事おつめくたふらうまいつくゆり  
九回りもしてゆすふせいのまふもりり  
りーやせり

大臣在邊之日任権帥務不可知府督仍貳  
府督也

御事ゆりかろにうらりけり

文武天皇大詔二年、月十六日大納言正三位  
石上<sup>ホノノ</sup>磐<sup>イハ</sup>魚<sup>イサ</sup>任大率帥是始也

されり大貳とひいしん帥とひりゆ何正帥擬  
親王宿仍承府督之人任於但承権帥志三任  
大貳任大貳と同正任権帥流例也今大貳仍府

督之概以云帥也

丁卯くーゆとくわとくわ北ときこさり

ゆくまふかかあそあはゆりゆれゆたもたゆ  
伊らとてんおとせりゆり

とるやひまかおとるゆあまのゆりゆり  
いまやれにふくーささるゆありまゆ

大鏡才二菅原相おひのゆふゆゆーゆりゆ  
るにけりゆりありーゆ輝きこゆゆゆり  
じま金のゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
ゆりゆり

譯長魚督時爰改一葉一為是主杜  
くゆゆゆゆ物ゆ書ゆゆゆゆゆゆゆゆ  
白氏文集四回口号絶ゆゆ

大率 大率 大率

いふ事なきと笑ふ事あり

日本記に曰く号と名くららにいと名ありと

ありて同也

或云白待曰約絶句とありて一白の約也

又云別名櫛と云ふ事ありて或又云うすうす

と云ふ事ありて書誤也強仕といふ事ありて

いふ事ありて今案之ありて

契りやそのかゝる事あり

青辞 り知乳 勅事 勅書 の事也

かの志とじしやいけん人志むるや

ありて事ありて

史記曰趙高欲為亂恐大臣不聽乃先設於

持麻獻於二世曰馬也二世笑曰亟相殺耶謂

唐為馬同左右也或然或言馬以取趙言或

言唐為周陰中詔言唐志以法 秦作皇

つ事や志がなぐる事あり

次なる海流なりて事あり

冬よりありて雷なりありて事あり

とありて事あり

惘然不寐終身夜雪近看白屋埋遙知

碧鮮家僕早迎散後寒誰掃撒千万言也

勅連綿亦嗚咽 王昭君 苦寒

志のあらは愛する事あり

胡角一吹霜後更漢宮前望月お腸 王昭君 胡語

伴行天小血の涙と痛し事あり

と天せり僻事也詞も胡志固り事あり



弟女成りて一婦りてはあり王昭君事也  
予もつて小一冊しりてはむらりうらら

樂行而去約一斤西傾月 伴行天

奥入云末劫云

今案大九以ふ和的

貴叢桂芳半且因三千世男一周と

天廻玄鑑雲侍壽唯是西行ふた邊

あこり御すくせ

善家  
代月卷

吾子御宿世

みわりの御や成るくあやまらる

とわわらむしるは是神祝也日記小た地字と

かゝるはりの白氏文集ふも八十一御書とあり但

たのなんふとたれゆふとゆわむりくあり成る

もゆめとむるは是古人語の成る

あつたふりて公とめはたむしるははけそらてはあ

えとりのけり

史記 高祖本記

曰古曰有信有息女願為季子箕

帚妾酒羅思媪怒也曰始帝歎奇此女与

夫人沛令善云来不与何自妾与劉字也云

曰此非見女子不知也年与劉季也云女乃呂

后也生者惠魯元

とらつてあはれ我こりてあはく世母とく是あふ事と

人よりのあはれ人よりのあはれ事なり

市歴説古今歌謡身風務之故穂季以遠次

及終祈徒迄李杜輩共國詞人同知志思

的牽流情前作美觀其所自多因終寃

謎遊征戎行梅凍解老病存沒別難情  
散於中文於外故憤憂悲傷之他道計令  
古什八九字世所認文古多收奇詩人在命為  
於斯見矣 白氏文集

漢家文物多例多矣

鄧相云在納言當家西宮丸府丸府内大臣  
以下按取賞女罪起配下月余不勝計

正權 記云...

竹ありり青ありりして石ありり松ありり

五架三間新草葉石階松柱竹編牆

白承天 昔好景下 新下公后 草葉

松ありり石ありり松ありり石ありり

わあうらやんせく

聽色と紅い糸二色糸 福語 紅い糸ふは為親服と

いふらま也但如延壽式者紅色也而きうらうら

あふふ裏也紅い黄い糸すうらうら糸うまい糸

色也函服り用之唯又黄衣うら糸

一祝云紫也也好志黄うら後糸

或云黄連衣を前友者老人着物也源氏モ依前

友着

又鄧相云配徳政國之時着黄袍之由有詩

勅西宮記云黄衣を和親王孫王後源氏及良

家子孫賜冠志着之云子孫復殿上無而時

用黄衣 或祝云...

玉鬘り連て 花輝りありり

御書より小ありからしり御をゆく一と云ふも  
所らに御ありしや此色と目祈のゆく源氏前友  
氏事へ是も何故ゆひのりまぬ揚貴とあるは  
能くこの夜もかきのくまらりし

二つくりするんまのりりやこれ也

圍碁 竟造一教丹朱

双六

孟嘗君造之

彈碁

後漢書梁冀能彈碁福川或云は

彈碁

兩人對局白馬碁右六枚先列碁

相當更先彈也其為以石為之

古今約語曰求食

彈碁有種一云唐唐質所為碁局方二尺中心高也

覆盆其顛為小碁局角微起

李高逸詩云玉作彈碁局中心最石平祝中書

也道古席德異人善彈碁

あ海はともりやうとていつもの

求食<sup>アサリ</sup>カゝりともりかつき一うや<sup>或海津物</sup>

碁局<sup>碁局</sup>云海人れゝつものまるといふありす

ひきりふいありや

御しんやしらしくさるゝやうりうりあそりあ子  
とりはてふり

婆羅訶天馬食散香楢

有ア回  
奈耶

元升への解と海はとるまのりうらとる

ろゝとす

十一年三月廿日引散之於禮上

十七年三月十日散之於健中倍舟夷凌也

高白別言不冬志似詩紙之 七言十四韵

一别五年方見面諸列天明竟不眠

生准共寄套波上獅回俱抛日日多

性本眇茫郊似夢回極卷落書歸泉

解悲泪濃春益裏以若交輾曉烟前

平天福不冬元禎下りりあいく他まろ詩白

うれとあふりていひんあをまま對向下り思ろま

く補給つるなり

官二のほり 累可 又古聲

下ろるるらるのうへ海今も秋のほり

風りあふりていひんあをまま對向下り思ろま

く此小ありてそ升よもあふりていひんあをまま對向下り思ろま

秋のほりから秋のうへ海今も秋のほり

胡馬湖山風越多巢有枝

約冬も胡馬湖山風越多巢有枝

之めいんゆり

好是寺こくゆりていひんあをまま對向下り思ろま

あふりていひんあをまま對向下り思ろま

そらるるれそわわり

たろるるるらるのうへ海今も秋のほり

やふりていひんあをまま對向下り思ろま

世風紀云三月上巳桃花水下之時飲食有脯飯

酒也 拓魂清魄拂除不祥

續漢書礼仪志云三月上巳日官人並禊飲

於東流水上

文選曰於是書工書之禊元巳之辰方軌齋軒

後干湯溪 而後賦

漢代三月上巳百友東流水上水也禊飲自

魏以後去因三日不用上巳續齊禮記云

廣功風俗通云梁之國祀女巫嘗年時以拔除

疾病禊志潔也故於水上暮潔

鄭國俗三月枕花水下事上巳溲洧二水上

執蘭業拓魏續魏後除不祥韓子

成郊祀曰三月三日在道祈福於鳧橋命曰

登羅市王羲之三月三日蘭亭序云永和九年

羣在癸丑當去之初會山陰之蘭亭修禊

事也 三月也

白樂天用成二年三月三日洛溪高約十二約

在

其人何事り川めり

軟障有畫易也視高畫軟障 堂上立

軟障堂下川漫又堂下立軟障事其人何

とくもて其人や

新儀式曰内宴日妓樂 虫 自後得殿軟障南

着

このりかかひ

道滿法師居住幡堂廻りけり

け物語能事 各り人々 保物諸

人々

人々

をとりし神も毎にたふしつとせむつと此れ此れ

四事并記曰高皇產靈尊下八百萬神於天

瑞河之川原八百萬神在

リ記

みきたして思ふ所を祈つるを代志神のまらしく  
ひらきぬまらりて

心より祈るごとくひらきぬまらりて  
是とぞりしはて神のまらりて  
大由成むまらりて

しらの吹らるる又ふら風あり

暴風卒起 屬澤惡雨。由王暴虎不飲

善事 金文の経

尚書曰武王既喪管叔及其群弟乃流言於  
國曰王將弗利於孺子周子乃告二王曰  
弗辟交之若家先王周公居東二年則  
罪人斯得年國中罪人此得 干後乃為詩

以贈王若之曰鴟鴞王亦未敢謂也

大勢未獲天大雷電以風二年也

凡言未則畫偃大本邦人大恐凡言

邦人皆王与大吏畫弁以啓金滕之書乃得

周公所自以為功代武王之說二云及王乃

同執史与百執事射曰信噫云命家勿敢

云王執書以泣曰其勿禊卜令滕篇

漢書曰君若恒風若師古曰凡言恒志視所行志

う此中の新王の心とてすもつてすもつて

うなるりけりとおほし

疾火に出現為釣らりて

ゆらりて為ぬき成新神新害懇祈せり

あてしきまらりてじよあま玉姫りあせて

はるや三年うめまつり也口年記り  
より又り年或る東夷と征し海河に橋國  
より上得國より海河より竜神あり  
よりとてまつりしを流風ありて海舟  
所まじとせしに才橋姫といふは御命りか  
りて入海してうせ治まり高橋姫と志あり  
て上野國雄飛坂とく東方と云くあり  
やとりの海いより東方とありし  
我れもわが心長端とく長くいつり  
東を死字也 紀正文あり

天平勝安元年遣唐使中有副使清原  
俊五位上玉年人丸心城史生上人丸  
心人丸集中有入唐之阿奇若以前  
丸大史お途中為海神被取端正養  
也見作年丸記

第十明石

光原氏自淑庶浦移居け下之故也

穴のきき

其れがこれ同事也

かろひあくさし 道のりらふい

かろひあくさし 小き心

新居しけり也 或云者しけりとも

名寄海よりわつく

系りしとこり西風せあや 夫物のみさしとわく

わんまゝふたふらふら

仁王會

經云講讀般若波羅密七難即滅七福即

生万性安樂帝王歡喜日月失度星宿失度

謂之七難 仁王經 持統天皇御宇始流來物

持統天皇

三月被行仁王會例

天曆六年三月廿七日癸未被行條付仁王

會

比のうにこれりたり此のうにいふら志つすゝ也

心もあつたり

金史の條ニアラリキナリ

毀誌善人故天降雹 大雨雷電 昂紙書三

大康徳宗皇帝代貞元三年戊申月廿日雹落大如

群石 長和二年三月雷鳴少降大如梅



祭りの時かきあは 幸若とん丸  
いふくらのさくら

音幣 白幣 九祀又五色幣あり

丁酉の祀らるるにさしをまつり海よりいふ

古語振造云至於盤余雅櫻物信古大社顯美  
日女祀曰浮濯於湖上因以生社凡有九社共  
上筒男命中筒男命應筒男命三社鎮  
坐寫是即今信古明社志神功皇太后  
一年幸<sup>七</sup>信古明神社中 西社衣  
通<sup>七</sup>社<sup>七</sup> 國基統或社功皇太后  
もく<sup>七</sup>社<sup>七</sup> 國基統或社功皇太后  
大八嶋古今所よりあまのま<sup>七</sup>社<sup>七</sup> 西社衣  
のり<sup>七</sup>社<sup>七</sup> 國基統或社功皇太后

此の事は... 家と... 入春... 雛家... 丸傳... 大炊殿... 一... 志... 柳子原

入春終七日雛家已二年隋滿道衛 麦家

雛家三日月落海 新千行

丸傳曰云御非王命不越境

大炊殿 新糺王祀 俗言巨炊屋之

一... 志... 柳子原

由來倚杖自歎息 倭須風定雲黑也 杜詩

桂嶺瘴氣重 似夢洞庭春 春水如天 柳子原

志... 柳子原

あ... 柳子原

志... 柳子原

志... 柳子原

粟大納言 千中下馬

播磨前司入道也

左の葉書

或云御書開口の家以後也皆稱入道殿之時  
恒下所て世間へ入道と云ふ事は湯中色  
自号新名

人志に如ふも夏上志人へてふと云ふ事は  
おのり

史記殷本紀曰帝戊丁即位思復與殷而未  
得共依三年不言世事決定於家辛以觀  
國風戊丁夜夢得聖人名曰祝以夢不見  
祝群臣百吏皆非也於是乃使百工嘗求之  
野得祝於傳巖中。見於戊丁一也。曰是  
也得而與之語果聖人奉以為相殷國大治  
或曰此外之例

あり此書て之解しと云ふしと云ふ事は  
此れは也

孝經云 不退有咎進不知退取禍之道也康  
事以不知進取不劫  
周易曰知進而不知退知存而不知已知得而  
不知喪其咎聖人乎

康書見下退而不知退之懷寡之國之毒也  
舟と云ふ

浪舟のまはるは舟と云ふ也吹風をまはるは舟と云ふ  
舟と云ふは舟と云ふ也

操是風風よりおとせたりと云ふ事は舟と云ふ  
舟と云ふ事は

舟と云ふ事は舟と云ふ事は舟と云ふ事は舟と云ふ事は

妙きり流る河川の如きも 於此 記

河川の如きも 記 浦風の如きも 記

心心小小そそふふをを 記

心心ゆゆもも 記 記

心心ゆゆ 記 記

よよののああらら 記

よよけけるる 記

是是をを 記 記

わわののまま 記 記

ははのの 記 記

かか 記

晋書嵇康傳曰嵇康嘗遊洛西暮宿華陽

亭川琴彈夜分忽有客訪之梅兄友人

而康去後音律詳致清并因素琴彈之而

為廣陵散聲調倫遂以授康仍稱不傳人

亦不言其姓名

雜抄云枕山康字林夜晉時難國人也康不

居之室每聞有人聲悽切康及竟不為人

後復同夢康更尋探見一鵲翮蓋鑽眼而

生康見惡之乃收為好理葬後是以去不同

悽切之聲有傾於夜中及見一人曰我乞

伶人也於我骸骨散野為其所傷不堪痛

切象君憐愍愍荷德之深所相報命授廣陵

散以酬君德康於夢中度之及覺死於

即得

七

靈異志曰嵇康居華陽亭操琴而臥堂  
中稱善中散曰君何不來此答云身是古人  
出致若此數千年美國君彈琴悲曲清和  
故來睡而斃然強毀不自及以琴授之作  
曲亦亦常唯廣陵散絕倫中散更之撰不  
得教他人

或書云嵇康字叔夜與向子期友善子期博  
屋至家志為妓精被侵叔夜客子期終夜調  
琴及半夜深覺發付浩事也叔夜曰阿誰答曰  
莫性我竟時之樂也名伶偏栖此處久矣  
於屋下我骨中積有年憂之故來斯所以  
已汝為若祛之為幸爰援廣陵散未名謝云  
自是叔夜琴名大震于世矣 晉帝詔叔夜

今後右不應証是以此終被誅嵇康將刑東市  
顧視日影素琴今而彈之曰昔表存后嘗以吾  
字廣陵散吾每斬之廣陵散於今絕矣

二のりよりの志しうひん  
日記云 村校業人

本業者らりりかりらるる成らるる毎志りのお積る  
りなり也たふの本業可くはあつひるひるなり也

一説云敬古人 志ありやう 後成てあ説  
信りりりりりり

つら世母秘のひゆり前のけりさ海とむいさ海らる  
松葉の爰経歌舞の奔り事也  
かゝいさりりりりりり

高麗集云琴瑟乃清神のあり

曰く曰くよふ瓜あふはひきはるけやあらん  
あつしあふはひきはるけやあらん 琴瑟也

あやしあふはひきはるけやあらん

風俗通曰 第秦瑟也 或説曰家恬所造五絃

築於并涼川 第秋如琴瑟多善第志故云

秦第釋名第施弦為第之也

或説漢恭帝素女成して五十絃の琴と説せ

し心琴声悲帝禁不得破て二十五絃琴也

丁秦里河破作十三絃今の第也

又天竺よりと仙道大王妙解彈て有部界奈

耶

く井をたらししはしんはひきはるけやあらん

海へいさしらしんはひきはるけやあらん

あふはひきはるけやあらん 三代りる

なりあふ

或古人天云 皇太后令浮琴瑟之事

周蘇湯如の御 してきて前大王といふ事

に新し 貞仁とてしる事とあふけり不得共

意物緒の行てし第此事とてしる事とあふ

しる事とあふはひきはるけやあらん

女乃をつしあふはひきはるけやあらん

しる事とあふはひきはるけやあらん

しる事とあふはひきはるけやあらん

しる事とあふはひきはるけやあらん

しる事とあふはひきはるけやあらん



引人なり

唐滅天聖女五宮懿子 母文在氏女子 嬰病為尼

此二主筆事如血脈之不見但上古師才不

詳爰後者若人中招以多之其所經法滅

天聖筆 玄上宰相也 大石首門 備并筆 打新所

教志中納言 卷 為うまゆり或又相承のふり

時之流絶す是血脈入所事とある也

今女五文と共流りたり

かたての心なりありあき人志なるあきなり

そつらとてけやす人ゆけき

長安倡家女尊字認翹於禊曹二善女年

長色妻委身為高人婦 認翹 白氏文集

白樂天江別司馬 下 危遠 を 徳く 為 陽江

上りて水中に夜認翹と源と好と夢と

鋒と好とく東都志と夢あり心感せ

允なり 我徒今年祥帝東禱居病外尋

陽城尋陽が亂と音楽終年不吟録行夢

今夜夢若認翹語如離仙 示耳留め

いふなり六の心成なりひてすを名年

いふなり海とれ音成とくはしり人ゆり

海ゆり

あふ上認翹 り とを ら 入道源氏母

かたりき こ 是源以前古筆やありて

なり

てのいふ い たり り あり り あり

年仕由音

伊豫丸の如く神水も亦くはるるは舟の如くやせりし事  
いせの海流交りたるをたの之保加比尔名法  
利号也付未年加比也以波年也每未也以波波  
年 催馬樂 伊豫海  
の名浦を走らせし海を神とつる也  
しきわうし

叙 詩よりと解叙つる也

舟より神の志と志りわやせりし事  
思ふ事なけさあしはる海舟の如く  
うねるもつる人いし  
うねるもつるや海舟の如く風あふ  
高嶺 催馬樂 年  
い海舟の如くわらわるる也

高嶺紙也くく色といふはあつておとくは高嶺

此色なかりき也

續撰道云 圓新法會と云は舟の如く又の如く  
舟の如く舊新紀の如く  
くはく老法神志海の如く  
うねるもつるや海舟の如く  
けくやあつる志の業は祀 一条院御製

は舟の如くけりやありし事

舟の如くあつる志の業は祀 一条院御製  
舟の如くあつる志の業は祀 一条院御製

舟の如くあつる志の業は祀 一条院御製  
舟の如くあつる志の業は祀 一条院御製  
舟の如くあつる志の業は祀 一条院御製



檀紙のふりつり件紙と陸奥國よりすれおき  
新葉のふりつりのふりつり檀紙のふりつり  
を海よりつり

いせの海舟年つりつりあし檀紙のふりつり  
玉のふりつりつりつりつりつりつりつり  
檀紙は藤よりつりつりつりつり

いせのふりつりつりつりつりつりつり  
をふりつりつりつりつりつりつり  
つりつりつりつりつりつりつり

つりつりつりつりつりつりつり  
つりつりつりつりつりつりつり  
つりつりつりつりつりつりつり

つりつりつりつりつりつりつり  
つりつりつりつりつりつりつり  
つりつりつりつりつりつりつり

つりつりつりつりつりつりつり  
つりつりつりつりつりつりつり  
つりつりつりつりつりつりつり

つりつりつりつりつりつりつり  
つりつりつりつりつりつりつり  
つりつりつりつりつりつりつり

つりつりつりつりつりつりつり  
つりつりつりつりつりつりつり  
つりつりつりつりつりつりつり

つりつりつりつりつりつりつり  
つりつりつりつりつりつりつり  
つりつりつりつりつりつりつり

つりつりつりつりつりつりつり  
つりつりつりつりつりつりつり  
つりつりつりつりつりつりつり

つりつりつりつりつりつりつり  
つりつりつりつりつりつりつり  
つりつりつりつりつりつりつり

后及懼自訶於天上帝震怒眾在難救多殊  
明察帝既覺而怒以事向於羽林左監計許永

あつときこつた  
瞰鬼イ 又選耶睨 リヤ 睽眦 新様多紀 斜眼 日慈仙布

あつときこつた  
周云解夢書曰周禮六夢

一曰正夢 二曰噩夢 三曰思夢 四曰寤夢  
五曰喜夢 六曰懼夢

以内中風ぬ之夜を憂ふ故解之何分の為正  
夢也

毛詩云東山周云東征也周云東征三年而歸昔  
歸士大夫羨之故作是詩也

五罪、標杖徒流死是也去是之後三年也

よこりてとくはく一月  
世一海一らとくはくわく

あつとよはくはく  
何く東の月を徒らに思ふくはく

思共六句  
思共六句

秋の夜は月毛の弱し秋の夜は月毛の弱し

久々の月毛は物打たるあつとよはくはく

月ひきくはくはくはくはくはくはくはくはく  
標のてんをくはくはくはくはくはくはくはく

そのこと成滞りありし人からうた世の事なること  
今更はつとよき事かいはかりされし事と云はれり  
人何れもあてふ事かいはりて

中よりやうりてこれ後よきことありし事かいはりて  
ちかひの事かいはりて

身もなげく事かいはりて  
身もなげく事かいはりて

御薬事 王上沖心事也  
あまの事かいはりて

中より結と綱子の結也散の結とひ也  
御地元のあまの事かいはりて

ありの御地元の事かいはりて

ありの御地元の事かいはりて

ありの御地元の事かいはりて

ありの御地元の事かいはりて

ありの御地元の事かいはりて

ありの御地元の事かいはりて

ありの御地元の事かいはりて

ありの御地元の事かいはりて

為大納言

淳和天皇天長五年三月八日乃及聖躬任

大納言永親元年八月始置四人

長祿二年六月又置五人

藤原賴通加任

又慶雲二年四月十七日

勅曰依官負令

大納言四人職掌既以大臣官位中納言三人

以補大納言不足同日勅大納言之二負為

之更置中納言三人以補大納言不足也

仍至乎中納言志是令外也云卿正負

志

太政大臣左右大臣各一人大納言二人中納言

三人參議八人

合十六人

寬平遺詔也

之為正負代々可申して加増する也大納言

増減事見瑞仍光源氏権大納言加任也是け

る也而每人一ははみ大納言と権大納言とを得

ずる事念ふ事也又是の事より大納言と

あつて権大納言とくるは次権大納言の負代

小瓶加任する也

是はるる一本は書りしつらり

昔云勲勞王家惟平幼人弗及知今天勳威

以歎因云之德教音風之威以朕小子共守我國

家礼亦重之也正郊天止而及風来則畫

起二云命郡人凡木而優畫起而築之來

則人積穀寒灰更煖枯樹後蒙後り也

是はるる一本は書りしつらり一年の事り

大海 百景記 海神 日景記 海庭 百景記 海若 日

わさつうしん 海の惣は是なり記 海神と書之也  
百景記 海若と書之なり 海若と書之なり  
新神也 山神なり 記 山神と書之なり 同公也

怪鬼事

根國 一庭國なり 事と源氏成丸建下

あつしん ことくはしん ことくはしん

かそつり ことくはしん ことくはしん ことくはしん ことくはしん

う 物事 百景十云 ことくはしん ことくはしん ことくはしん ことくはしん

同十七 ことくはしん ことくはしん ことくはしん ことくはしん

古今集 水と煉萩 ことくはしん ことくはしん ことくはしん ことくはしん

かつしん ことくはしん ことくはしん ことくはしん ことくはしん

まけしん ことくはしん ことくはしん ことくはしん ことくはしん

古人云 伊摺大神官の造 聖白 廿一年よめくら  
事 白の前の三年 ことくはしん ことくはしん ことくはしん ことくはしん  
人 ことくはしん ことくはしん ことくはしん ことくはしん ことくはしん  
あまのこ ことくはしん ことくはしん ことくはしん ことくはしん ことくはしん  
ことくはしん ことくはしん ことくはしん ことくはしん ことくはしん

文武天皇 朱鳥二年 廿九年 一 度うん ことくはしん

事 ことくはしん ことくはしん ことくはしん ことくはしん ことくはしん

次 ことくはしん ことくはしん ことくはしん ことくはしん ことくはしん

物 ことくはしん ことくはしん ことくはしん ことくはしん ことくはしん

海 ことくはしん ことくはしん ことくはしん ことくはしん ことくはしん

増 此云 摩愚那波 ことくはしん



見物也  
前々  
射口  
志輝  
祓  
可  
見物也  
前々  
射口  
志輝  
祓  
可  
見物也  
前々  
射口  
志輝  
祓  
可

